# 横須賀水交会

## 「総監挨拶」

横須賀地方総監
海将　高嶋　博視

今夏の定期異動で横須賀地方総監を拝命した高嶋でございます。宜しくお願い致します。再び横須賀に帰ってこられましたことを、家内ともども感謝致しております。皆様の御支援を賜りつつ、任務を遂行したいと考えておりますので、何卒宜しくお願い致します。

平成19年10月14日付の本誌に、護衛艦隊司令官就任時の挨拶を掲載していただきました。今一度読み返してみますと、何と肩に力が入っているものかと赤面してしまいます。

総監に着任して早３ヶ月が過ぎましたが、この間に多くの方々にお会いし、日々新たな発見をしております。そろそろ還暦を迎えようかという歳になりながら、不明を恥じる毎日です。

私の現下最大の関心は「大地震」です。震災がないことを祈りますが、さりとて、こればかりは人間の力では如何ともし難く、今夜或いは、明朝起きるかもしれません。私は「平時における有事」と位置付けております。いかにして大災害から国民を守るか、真剣に考え、備えなければならないと考えております。水交会の皆様からも、お知恵を拝借したいと思っております。

話は変わりますが、就任後、家内とともに馬門山海軍墓地にお参りしました。その際、明治期に祀られた水兵（約２００柱）の墓碑の一部が大層痛んでいることに気が付きました。倒れたままになっている柱、表面が剥離している柱、今にも剥離しそうな柱、雑草（蔦の一種）が全面を被っている墓石等々、かかる現状を目の当たりにし、今日の繁栄を享受している一国民として、また海上自衛官として、英霊・先人に対して誠に申し訳なく、思わず涙を落としそうになりました。同時に、短パンとTシャツの出で立ちでお参りしたことを心から恥じました。

同墓地は戦後横須賀市に移譲され、市営墓地になっておりますが、何はともあれ、私が動かなければならないのではないか、と思っております。今私に具体的な「案」があるわけではありませんが、「とにかく動け」と自分に命じております。

今日の東シナ海は、我々の想像以上に波が高いと感じております。今後、更に高くなると思われます。明日に備え、仕事に尽くす所存でありますので、今後とも御支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

発行　平成22年11月10日
編集　横須賀水交会事務局

（写真：馬門山海軍墓地）
「横須賀地方総監提供」

## 横須賀水交会主要行事予定

３月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交会ホームページ(http://y-suikoukai.daa.jp/)で御確認下さい。

**１　幹事会**

（１）期日　12月16日（木）
　　14：00～17：00
（２）場所　総合福祉会館
（３）会議後、懇親会

**２　合同賀詞交歓会**

（１）期日　1月15日（土）
　　13：30～15：30
（２）場所　横須賀商工会議所
（３）会費　４千円（女性２千円）

## 平成22年夏期防衛講座開催
### 演題「こんな日本でいいのか」
### 平和・安全保障研究所理事長　西原　正　氏

横須賀防衛諸団体共催恒例の合同夏期防衛講座が、平成22年度は記念艦「三笠」において８月21日（土）に開催された。この日は、残暑と言うよりもうだるような猛暑であった、にもかかわらず、３５０名収容の「三笠」講堂は、現役陸海空自衛官を含む来賓及び熱心な各団体会員並びに約30名の一般公募から選ばれた聴講者で略満員となり、予備の椅子も使用する盛況となった。

今回の講師は、前の防衛大学校校長、現在は（財）平和・安全保障研究所理事長としてご活躍中の西原正　先生である。

第１部「講演」は、小山横須賀防衛協会会長の挨拶に始まり、講師紹介に引き続いて、いよいよ西原講師が大きな拍手に迎えられて登壇された。演目は「こんな日本でいいのか」である。やや刺激的な演目に聴衆は固唾を呑んで講師の第一声を待っている。講師は、先ず、アフガニスタンで殉職された奥参事官の棺を空港で出迎え、これを担いだのは、故参事官の出身大学ラグビー仲間の縁で千葉県警儀仗隊であったということから講話を始められた。

国に殉じた人を国として遇する心・仕組みがない国である、と。続いて、民主党政権の閣僚が誰一人、終戦記念日に靖国神社に参拝しなかったこと。民主党が国歌、国旗法制定に反対したこと。防衛費と子供手当てに見られる政治感覚に対する違和感等々を例に分かりやすく、日本の由々しい現状を講演された。

講演終了後の質疑応答は、待っていましたとばかりに、長崎（横須賀水交会）会長をはじめ参会者から鋭い質問が投げかけられた。核保有をめぐる質疑応答では、質問者に賛同の拍手が起こるなど会場も熱くなったが、講師は冷静に自説を説かれた。時間の関係上、その他の質疑応答は懇親会の席上でということになり、第１部「講演」は多くの示唆を聴講者に与えて終了した。

第２部、場所を「三笠」中部甲板に移しての「納涼懇親会」では、講演の余韻が冷めやらぬままに、早速、参会者が講師を囲んで遠慮のない質疑応答が再開された。そこかしこのテーブルでは参会者同士の防衛談義に花が咲き、旧交を温めあう姿が散見された。また、この場は、現役諸氏から自衛隊の現状を聞くまたとない機会でもあり、まさに横須賀防衛諸団体の貴重な交流の場でもあった。このように和気藹々ながら熱っぽく意見を交換する内に時間は瞬く間に過ぎて、第２部もあっという間に幕となり、平成22年度横須賀防衛諸団体合同夏期防衛講座は所期の目的を十分に達成して、予定通り終了した。

なお、補足すれば、今回の主幹事は隊友会横須賀支部であったが、横須賀水交会も炎天下の天幕展張、受付及び講師接遇等に微力ながら幅広い支援を行い、防衛講座の円滑な開催にいささかの貢献ができたものと思う。ご支援いただいた役員の皆様にはこの場をお借りして厚く感謝申し上げます。

（保井幹事　記）

## （部隊研修）
## 最新鋭護衛艦「ひゅうが」を研修

９月10日（金）、横須賀水交会の平成22年度部隊研修が、護衛艦「ひゅうが」（艦長　山田勝規１等海佐）で実施され、長崎会長以下１２４名の会員が参加した。最新鋭の護衛艦の研修とあって、参加者は過去最大の人数に達した。

護衛艦「ひゅうが」は中間修理中であり、懸念された台風９号は衰えた熱低となり、前日には関東を通過し、当日は穏やかな好天に恵まれた研修となった。

研修の受け付けは、「ひゅうが」格納庫で行われ、会員はまずはその大きさに驚き、ブリーフィングの行われる多目的室までの長い経路に再度驚かされた。

最初に、艦長から挨拶及び概要説明が行われ、要目性能及び就役以来の活動の状況が披露された。

概要説明終了後、20名ずつのグループに分かれて、艦艇見学を実施した。

艦内見学では、優れた情報関連機器、高い指揮管制能力及び多機種多数のヘリコプターの運用に関する理解を深めることができた。最新鋭艦とあって、その大きさもさることならが、新たな機能に、百聞は一見にしかずと多くの会員も感心していた。

また、艦内見学では、終始きびきびと案内、質問に明確に受け答えされた乗組員の態度は、立派であった。

その後、場所をホテルハーバー横須賀に移し、山田艦長以下９名の「ひゅうが」乗員の参加を得て、懇親会が行われた。長崎会長の挨拶と乾杯の音頭で、懇談に入ったが、例年に倍する参加者で、久しぶりに顔を合わせる会員もおり、会は大いに盛り上がった。特に今回初参加の石渡会員のオーボエによる「君が代」、「軍艦」等の演奏が披露され、往年の隊歌演習の成果を発揮し会員一同思わず大合唱となった。締めは、土井幹事長による乾杯により、次回を期して、名残を惜しみつつも散会となった。

部隊研修は、会員に対し最近の部隊の現状を知ってもらうと同時に、現役を激励し、現役とＯＢの交流を目的としており、今回も充分その目的を達成したとうかがえる。

護衛艦「ひゅうが」に栄光あれ。武運長久を祈る。（廣江幹事　記）

## 【投稿】
## 尖閣諸島における
## 中国漁船の事件に思うこと

幹事　河村　雅美

### これは偶発的事件か？

先月、尖閣諸島の我が国領海内で操業していたと思われる中国の漁船が、この海域の哨戒に当たっていた海上保安庁の巡視船に対し公務の執行を妨害し、この巡視船に衝突するという事件が起こった。

その後の経緯については、広く知られるとおりであるが、この事件の背景をみると果たして偶発的な事件であったのか甚だ疑問である。また、この度の事件を通じて中国が改めて尖閣諸島を領土問題化し、このことを国際社会に印象付けた事実も免れえない。

南沙諸島ミスチーフ礁の建造

我が国は、今後の対応として国際社会に対して我が国の正当なる主張を訴え続け、関係国と協調して海の秩序維持に努

めなければならないことは言うまでもない。更に我が国固有の領土、領域の保全に関わる重大な問題であることから、中国が南シナ海で行ってきた侵略の史実を見据え、これを防ぐため、領域の警備に関わる法整備を急ぐ必要がある。

**この事件の背景にあるもの**

１９６８年に実施された国連アジア極東経済委員会（ＥＣＡＦＥ）による東シナ海大陸棚資源調査の結果、同大陸棚とくに尖閣諸島周辺海域の海底に石油資源が豊富に埋蔵されている可能性のあることが分かり、これを契機として、突如中国と台湾が尖閣諸島の領有権を主張し始めた。以後周辺海域での海洋調査船の活動が頻繁になった。

一方、日本政府は中国との「友好関係」を第一義的に考え、尖閣諸島の領有権を一時的に棚上げし、ＥＥＺの日中中間線付近での海底資源については共同開発の方向に甘んずるという消極的な姿勢に終始してきた。その結果、東シナ海における日中中間線付近での中国の天然ガス田開発を許し、この問題でも我が国は後手、後手に回らざるを得ない状況にある。更に中国は国連・大陸棚限界委員会に対し、東シナ海における中国の大陸棚を沿岸から２００マイルを越えた沖縄トラフまで主張している。

早くから海底資源開発に関心を持ってきた中国は、１９８０年代に入ると、東シナ海の中間線付近において継続的に資源探査・試掘を実施し、１９９２年２月の領海法による法的裏付けをえた後、同年５月石油鉱区を設定して、これを国際石油資本に開放した。

１９９２年、江沢民は、国家目標として、「国家領域の主権」、「祖国の統一」及び「海洋権益の防衛」を掲げた。同じく「領海法及び接続水域法」を制定し、台湾、南シナ海、東シナ海に点在する島嶼を自国の領土と一方的に規定したのである。我が国の尖閣諸島や南シナ海の島嶼の名称も自国領域として明記されている。しかも、「領海及び接続海域に許可なく進入する外国の軍艦を排除し、追跡する権限を中国軍の艦艇、航空機に付与する」という異例の法律である。

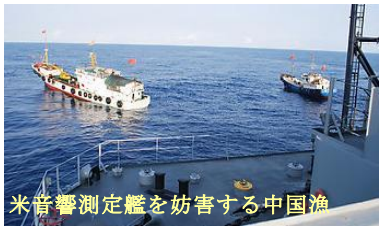
以後、漁船等を動員して度々尖閣諸島周辺海域で示威行動を行い、また、過激分子が上陸を強行するなど実力を行使してきた。２００８年12月にも、中国国家海洋局所属の調査船２隻が領海を侵犯したことがあり、警戒中の巡視船の退去勧告にも従わず確信的な行為である。この度の中国漁船衝突事件も、この延長線上にあり偶発的な事件とは考え難い。

**南シナ海における実効支配の先例と中国漁船の実態**

２００７年、中国は、南シナ海の西沙諸島、中沙諸島及び南沙諸島を管轄する行政区分として三沙市を設置するとともに海南島の南端三亜に海軍艦艇基地を増強し、南シナ海において定期的に大規模な演習を行うなど南シナ海の実効支配を一層確実なものにしつつある。

１９７０年代から始まった中国の南シナ海実効支配の経緯を見ると、先ず当該海域における中国漁船の活動を既成事実化し、これを支援する名目で武装した漁業監視船等を派遣、継いで島嶼或いは洗岩にまで人工建造物を設置して要塞化し、最後は海軍艦艇を展開して周囲を恫喝し、侵略を完結するというパターンである。

このパターンを見ると中国漁船の活動は、中国の海洋権益拡大と海洋侵略の先兵となってきたと言える。また、昨年南シナ海において米音響測定艦の前に立ちはだかり妨害したのも中国漁船だったことが思い起こされる。


米音響測定艦を妨害する中国漁

この度の尖閣における中国漁船の事件とその後の中国政府の対応をみると、正に南シナ海での侵略パターンを髣髴させるものがある。

中国漁船は、海洋権益拡大と海洋侵略の先兵であり、今や人民解放軍海軍の民兵組織として機能的に組み込まれ定期的な軍事訓練まで受けている。中国は、現在３万隻の商用トロール漁船を保有しており、そのほかにも５万隻の機帆船漁船があると言われている。これらの漁船は、活動範

機雷敷設訓練中の中国漁

囲にある海に精通しており、漁船を隠れ蓑として緒戦における機雷敷設などにも使われる可能性があると指摘されている。中国漁船は、正に「海における人民戦争」を支える人民民兵と位置付けられる。

**海洋の侵略に対する非対称な戦い**

中国の漁船を先兵とした海洋権益の拡大と海洋の侵略に対して、法治国家である我が国は非対称な戦いを強いられることになる。非対称な戦いという点では、正に「テロとの戦い」と共通するものがある。

２００１年の９．11米国における同時多発テロが起った際、ジョージW.ブッシュ米国大統領は、このようなテロ攻撃は「戦争行為(Acts of War)」だと断じた。更に自由と民主主義が危機に瀕している情勢だとして、このような新しい脅威に対抗するために「テロとの戦い」(Global War on Terrorism / War on Terror)、すなわち対テロ戦争が開始された。米軍を主力とした有志連合による「不朽の自由作戦(Operation Enduring Freedom)」である。

その一環としてペルシャ湾及びインド洋では「海上阻止作戦」(ＷＩＯ：Maritime Interdiction Operations)が行われている。我が国の対応としては、現行法の制約から「臨検」等実効性のある武力行使ができないため、ＭＩＯを行っている有志連合への後方支援等に限られた。これが所謂「協力支援活動」である。

つまり、「テロとの戦い」と同様に、従来の戦争の概念とは全く異なる非対称な戦いにおいて、我が国の現行法の範囲では、独自では十分な対応が取れないということが懸念される。漁船を先兵とした我が国固有の領土と領域に対する侵略であったとしても、現行法の範囲では警察権の行使に止まざるを得ないということである。

北朝鮮の「武装工作船」への対処が警察権行使の範囲に限られた「不審船対処」に留まってきたこともその先例である。工作船による諜報員の潜入、麻薬密輸、偽札搬入、拉致等を犯罪のレベルで捉えるのではなく、我が国の安全を脅かす破壊工作として認識して対処すべきであった。

防衛白書の記述中に「テロとの戦い」を「テロとの闘い」、「海上阻止作戦」を「海上阻止活動」としているように軍事的色彩を極力少なくするような意図の感じられる表現が使われているが、軍事力の本質的な意義までこの矮小化された概念に縛られてはならない。そして、非対称な戦いにも適切に対応できるよう一刻も早く法整備を行う必要がある。

**中国の三戦（輿論戦・心理戦・法律戦）との関わり**

中国漁船が逮捕された後の中国の対応を見ると、２００３年に改正された「中国人民解放軍政治工作条例」に追加された次に示す三戦の考え方が如実に伺える。

（平成21年版防衛白書から）

○輿論戦＝中国の軍事行動に対する大衆および国際社会の支持を築くとともに、敵が中国の利益に反するとみられる政策を追求することのないよう、国内および国際世論に影響を及ぼすことを目的とする。

○心理戦＝敵の軍人およびそれを支援する文民に対する抑止・衝撃・士気低下を目的とする心理作戦を通じて、敵が戦闘作戦を遂行する能力を低下させる。

○法律戦＝国際法および国内法を利用して、国際的な支持を獲得するとともに、中国の軍事行動に対する予想される反発に対処する。

中国の輿論戦における国際世論への影響は、チャイナリスクを世界に露呈し、南シナ海における領有権問題を再燃させる火種を残した。一方、尖閣諸島の領土問題化を国際社会に印象付け、日本との領土問題におけるロシアとの強調路線を引き出した。

心理戦の結果としては、当初相当に強硬であった中国が、やや軟化の姿勢を見せた途端に一部の国内メディアが「中国　収束へ転換」(日本に行動を）の見出しの記事を載せるなど、日本の極めて弱い面が露呈した。恐らくその後に続く文脈としては、「日本は中国との『友好関係』を第一義的に考え、尖閣諸島の領有権を一時的に棚上げし・・・共に利益を享受し繁栄させよう」となるのであろう。正に、胡錦濤国家主席の提唱する「和諧世界」の構築を共に目指すかのようだ。

ここでは、「和諧」の意味するとこ

ろが決して文学的な語感の持つHarmoniousなものではなく、多分に政治的でHegemoniousなものであるという筆者の独断的所見を付け加えるに止める。

懸念されることは、我が国固有の領土と領域への侵略に対し、これを守る気概まで失ってしまうことだ。

法律戦に関しては、むしろ我が国もこの考え方を取り入れるべきである。例えば「国際法および国内法を利用して、国際的な支持を獲得するとともに、我が国の正当な防衛力の行使を可能とする」というような具合である。

第一に、国際法上認められている国家の権利として集団的自衛権が行使できるようにすることである。

第二に、領域の警備を含み非対称な戦いにも応じうるよう国内法を整備することである。これらの法整備が整ってこそ、「法治国家として法律に則り粛々と対処する」と言い切ることができるのではなかろうか。

**【投稿】**

## 「イスタンブール」

会員　佐野　恭子

穏やかな晩夏の光を浴びて、私はトプカピ宮殿の薔薇のそばで夫が入場券を買うのを見ていた。がっしりとした50代の男が、流ちょうな日本語でガイドを雇わないか、と訊いてきた。彼は「どのくらいトルコにいますか。どのくらい滞在したいですか」と言い、私は「2年は居たいですね。トルコを理解するには」と答えた。「トルコ人は、どうですか」「親切で、暖かくて・・正直です」「最後の違いますね。トルコ人ごまかすでしょう?」私は反論した「貧しい人が、ごまかすのは苦しいからです。嘘をつくのは苦しい」その瞬間、その男との間に何かが流れた。ハーレムだけは、日本語できちんとガイドをつけて説明を聞いてほしい、と彼は主張した。「1時間60リラです（３６００円）」私は「30分で30リラに」夫が入場券を買って近づいてきた。ハーレムに入ってアルテン氏の最初の説明「床に、特別の石が模様になって敷き詰めてあるでしょ、これ、レッドカーペットいい気分になるのと同じ。特別の人の歩くところだから」ガイドが30分たった時、私はそれと気付いたが、夢中だった。私は質問し続け、彼は説明し続けた。アルテンの私見で言えばハーレムは、女の寄宿制の学校でもあった。敗戦などで美女が捕虜になり、奴隷として手に入ると「喜んで宝物です。高く売れるから。そしてこの学校に連れてくる」暴力をふるって美女の経済価値を失うようなことはしない。「エリートとしての教育を施します。窓には柵があり逃げ出すことはできないけれど、野心のある女の人は、お妃になろうとしますし、そうでない人は、不幸かもしれませんが、お妃にならなかった女性は、30歳になると家来と結婚して地方で暮らして、そこで人々に教育をします。尊敬を受けます。それが地方の教育制度でした。悪い人生ではないです」新王の最初の登殿に、お目見えできる全員がお金を貰い、自由に市場に行って買い物も出来たと言う。大切なのはハーレムの出身〈ハーレムの内情を生涯口にしない事だ。ハーレムには学者達がいる。男たちは宦官であり、王女達は学者の居室に自ら訪ねてくることもできる。宮廷で必要な力仕事は、黒人の宦官が担った。万万一間違いがあっても、生まれてくる子供の肌が、事実を語る。ハーレムの入り口にイタリア製の豪華な縁取りのある1組の巨大な鏡があった。それはセキュリティである。「ここを通る誰もが、どこからも見えるから」出入口の監視は厳しかった。妃を決めるのは王の母親であり十分な教育を受けた何人かを母親が何度も接見して品定めをする。「トルココーヒーを入れるのは、日本の茶道と同じ教養です。王様のお母さん、自分に反抗しない人を選びます」だそうで、妃は、普通1人であった。王があまたの美女を檻に入れて酒池肉林、狂乱の限りを尽くすハーレムと言う観念が粉々に壊れて行った。私は先入概念と戦い、アルテンは穏やかに説明し続けた。オスマントルコが６３０年、江戸幕府の倍の長さを維持できた理由は、女に手厚く教育を施し、少人数のエリート教育ではあるが、それを持って地方の子女を教育したからだ、と言うのがアルテンの私見であった。トプカピ宮最初期は貧しいモルタル塗り

であり、その時期以外の部屋は、王や王子の部屋にあの高名な「青」のタイルが張ってあり、暖は火鉢（炭が入っている）でとった。寝床は「畳敷き」に布団であった。ただ、畳はイグサではなく目はもう少し大きい。壁にしばしば蛇口があった。権威を示すと同時に王が臣下と相談するときに水音をホワイトノイズとして使うためである。水によるホワイトノイズは建築界の優れた手法だ。国連近くのニューヨークの極めて小さな公園に有った。水の爽やかさとともに、せまいベンチで話しても水音があるために隣の話し声が聞こえず、ヒトテリトリーがぐっと狭まる。「王様の言う事が部屋の外で聞こえないためです」水と言えばふろ場、大理石で作られていると言えさして豪華でもない広いふろ場、蛇口が金で出来ている事、牛乳風呂のための牛乳の出てくる穴、トルコ式トイレの穴が大きい事くらい。ただ、・・・驚いた事があった。「おふろで王様一人になりたい時、あるいは安全のためにね、殺される場合もあるので」金色の格子で閉じられた檻（3畳ほどか）があった事だ。なぜ、ふろ場で、一人になる必要が有ったのか・・・ハーレムのふろ場のサルタン黙考する　一人を守る小さな金の鍵　日本語が非常に流ちょうなアルテン氏が唯一間違えた単語があった「蛇口」と「ジャグジー」である（笑）。ハーレムにジャグジーはない。が、今日、トルコ人の経営する豪華ホテルでは必ずジャグジーがあり、それこそが贅、これが歓迎と思う様子。トルコ人はとても水を愛するだけにお風呂にはジャグジーという夢を持っているのだろう。

　王子たちは5歳になると母親を離れ教育者のもとで過ごす。王になれる可能性は低い。王子たちの為に図書室、勉強室、屋外・室内の巨大なプール、乗馬、そして幼い皇子のための「動物園」があった。図書/勉強室はとても天井が高く大きな火鉢があり、殺風景でさえある。けれども唯一その部屋からだけ広い石敷きの中庭を通して、お互いに格子の付いた窓越しに、最後の競争に勝ち抜いてきた16人の美姫たちの個室が望める。

　万に一つ美姫と皇子の絡めあう視線行きかうハーレム中庭　言葉はおろか何ひとつ交わすことは出来ないけれど。老いを感じ始めた王子と、間近に30歳を迎える美しい人の静かな心の通い合いもあっただろう、ずっと年上の美姫を一目見て、何もかも忘れた年少の王子もいただろう。今はただ、風が吹きわたっているだけ・・石敷きの中庭から下を見ると、空っぽの広いプール跡がある。そのあたりは高い塀が囲んでいて長い間、海外のメディアからも遮断されてきたという。宮殿内の壁面は白地のタイルに青い模様がほとんどであったが赤いチューリップが水の代わりに噴水からあふれている図柄があった。この国の特別のシンボルである。・・・そして60分が経ち、私たちは庭に出た。現実に戻った私たちを、晩夏の午後の黄色い光とボスポラス海峡からの快い風が包んだ。荘重な石創りの議事堂が聳えている。トプカピの議事堂　晩夏の光浴び風と時間が吹き抜けて行く・・・

「僕のお祖父さんは奥さん２人だったので、お金もエネルギーも、とても大変でした」アルテン氏はにこにこして走る真似をした。夕飯はお勧めレストランを彼の名で予約してもらい別れた。宮廷のベンチからアジアとヨーロッパを結ぶと言う紺碧のボスポラス海峡が見える。私の中で暴れまくっている「本当のハーレム」が落ち着いて行くのに、1時間かかった。プラタナスの梢を揺らして、風が吹き抜ける。

「悠久と　蒼穹の国　トルコかな」

アルテン氏のレストランは「神風タクシー」で12リラ（1リラ60円）葡萄棚に覆われている席もあり、私たちは暮れなずむ大きな空の下に座った。真っ白なテーブルクロスに、ブラックタイ、カフスのウエイターが肩に担いで12、3種類の前菜を持って来た中で選ぶ。2mほどの巨魚、15、6㎝の可愛い赤い魚が砕いた氷の中で埋まっている。魚の説明を受け、料理法を選んで注文する。ワイングラスの触れる音、皿の音。刻々と空は色を変え、ナプキンに包んだ熱いパンが熱出てくる・・1人前3，000円ほど。しばらくして星が見え始めた。そんなイスタンブールであった。

## 海賊対処５次隊帰国、出迎え

10月15日午後、ソマリア沖アデン湾において、第5次海賊対処任務に従事していた護衛艦「むらさめ」(指揮官　第1護衛隊司令　篠村靖彦1佐、艦長　菅野正隆2佐　乗員約190名)が任務を終えて、横須賀に入港、逸見岸壁に接岸、帰国した。

5月10日横須賀を出港、6月上旬から、現地で護衛活動を行い、9月下旬、6次隊と交代、任務を終了し、この度帰国したものである。僚艦の「ゆうぎり」も同時に入港し、同艦は10月17日、大湊に帰港した。

高嶋横須賀地方総監執行による帰国行事は、松本防衛大臣政務官、吉田横須賀市長、海上保安庁警備救難部長、第3管区本部長、日本船主協会役員、倉本自衛艦隊司令官ほか各部隊指揮官、隊員、家族など多数の出迎えがあり、横須賀水交会は松崎顧問、本多副会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えた。

司令帰国報告、内閣総理大臣特別賞状の授与、防衛大臣政務官訓示、自衛艦隊司令官訓示、来賓紹介などの行事は整斉と進められ、乗組員は、長期の任務行動の直後であるが、疲れも見せず、任務を完遂した誇りを持ち、頼もしい雰囲気であった。

5次隊は、累計34回307隻の船舶を護衛し、海賊行為を抑止し、これらの船舶を安全に航行させた。

9月末現在、第6次派遣海賊対処行動水上部隊までの累計護衛実績は、1，158隻に及んでいる。P-3C哨戒機による派遣航空部隊とも共同し、海上自衛隊として、立派な成果を挙げている。

報道によると、10月中旬ケニヤ沖で日本の船舶が海賊に襲われた事案が発生おり、現地の状況は厳しい状況にある。

海賊対処行動は長期間にわたり、モンスーンなど厳しい環境において、不審船に対処するなど、実際の場面もあり、連続して緊張を強いられることから、そのご苦労は大変なことと思います。

関係各国や日本船主協会から高い評価を受け、国益に寄与した指揮官及び乗組員各位に対して、深甚なる感謝と敬意を払います。有難うございました。　（本多副会長　記）

## 新型掃海艇「えのしま」が進水

10月25日、ユニバーサル造船横浜事業所で平成20年度計画中型掃海艇の命名・進水式が高嶋横須賀地方総監のもと執り行われた。

この艇は、従来の木造艇と異なり、船体にGFRPを使用した海上自衛隊初となる掃海艇であり、官民上げて取組んできた永年の研究開発の成果が結実したものである。

防衛大臣の代行として高嶋横総監によって「えのしま」と命名された後、支綱が切断されシャンパンの祝いの洗礼を受けた「えのしま」は、横須賀音楽隊による軍艦マーチの中、くす玉が割られ「祝、えのしま進水」の垂れ幕と多数の紙テープを翻しながらゆっくりと船台を滑走して海上に浮かんだ。

厳粛な中にも多勢の建造関係者や参列者等の思いを受けてゆっくり船台を滑走しての進水は、情緒があり素晴らしい進水式であった。

引き続き行われた祝賀会の席上でも、沢山の参列者の間で「見事な進水式でした。感動した。」という意見があいついでいた。

横須賀水交会からは、本多副会長はじめ松崎顧問等それぞれの立場で9名の会員が参加して進水を祝った。

なお、「えのしま」は、これから

艤装を行い1年半後の平成24年3月末に就役する。（小島幹事　記）

## 海上自衛隊記念日行事に参加

10月30日、台風14号が接近する空模様の中、高嶋横須賀地方総監主催により、横須賀厚生センターにおいて、横須賀地方隊自衛隊記念日行事が行われた。

吉田横須賀市長、横粂衆議院議員、県議、市議、米海軍7艦隊司令官、在日米海軍司令官など来賓多数参列の中、国歌斉唱、総監訓示、来賓挨拶(市長)、感謝状贈呈などが行われた。

感謝状は、防衛基盤育成に貢献等の横須賀防衛協会会長の小山満之助氏、晨洋会(会長 田辺清作氏)、IHIマリンユナイテッド横浜事業所等14の個人、団体(企業)へ贈呈され、参列者からも祝福された。

祝賀会は、多くの指揮官等現役とゲストとの和やかな交歓が行われた。総監のユーモア溢れる挨拶で、イージス艦「きりしま」が昨10月29日、ハワイにおいてSM-3の試験を成功裏に終えたとの披露があり、併せて祝福された。

（本多副会長　記）

## 第21回横須賀水交会主催ゴルフコンペ

去る10月22日(金)、第21回横須賀水交会主催ゴルフコンペを千葉房総半島のエンゼルカントリークラブにて開催しました。

当日は、晴れときどき曇り、無風という絶好のゴルフ日和であり・長崎会長以下67名のゴルフ愛好者がプレイに熱中しておりました。

67名の参加者となり、終了後の表彰式兼パーティを考慮すると前回の鹿野山ゴルフ倶楽部と同様、3コースあるゴルフ場ということでこのエンゼルカントリークラブを選択しました。山あり、谷ありの山岳コースを今回の参加者はものともせず、ゴルフを楽しんでおりました。

今回も陸自出身者1名、民間からの参加者が2名、会員夫人1名あり、会員、海自OBの親睦だけではなく、ゴルフを通じて横須賀水交会の活動を広報するという目的を達することができました。

競技は新ペリア方式で実施しましたが、優勝を林彬氏がグロス92、ハンディキャップ21、ネット70で勝ち取り、2位には長崎会長、3位山田裕千氏という成績でした。

ベストグロス賞には、シニアの部(65歳以上)近藤義美氏がグロス81で，ジュニアの部(65歳未満)窪田修治氏がグロス80で、ウーマンの部吉原洋子氏グロス90で受賞しました。

会員の親睦を目的としたゴルフ大会ですが水交会会員のみならず、陸海空自衛隊のOBや友人・知人・家族まで幅を広げて参加者を募り、水交会の活動に理解を深めていただければ幸いと思っています。たくさんの方に声をかけて参加者を増やしていただくようご協力よろしくお願いします。（持永幹事　記）

## 懺悔のバーベキュー

去る10月9日土曜日の午後2時より、葉山御用邸からそれほど遠くない会長（長崎嘉徳）宅でバーベキューを実施した。あいにくの小雨ではあったが、男女合わせて15名の会員が参加した。バーベキュー、チャンチャン焼き、サラダ、おでん、などの料理に、ビール、ワイン、日本酒、焼酎、ウーロン茶、などの飲み物、会長ご夫妻による準備の大変

さが肌で感じられた・・・。

このバーベキューは、長崎会長が、我儘な会長を陰に日向に支えて水交会業務を推進している常務幹事を招いて、常日頃の懺悔と、ご苦労への感謝、長崎仏法のお布施、etc.の目的で開催された。参加者は、飲

んで、食べて、語って、大いに盛り上がり、雨が強くなってからも続けられ、ついには家の中に避難し、それでも続けられ、午後８時を過ぎてお開きとなった。皆、名残りは尽きない様子で、会長の心配りに心からのお礼を述べて帰路についた。

毎回、自由闊達な議論を展開する常務幹事会は、これを機にその雰囲気は益々冗長され、これまで以上に和気あいあいとした水交会行事、業務の遂行が予想される。

横須賀水交会の前途は明るい！！！　（初谷幹事　記）

## 新型護衛艦「あきづき」進水

海上自衛隊のホームページによると、10月13日(水)三菱重工長崎造船所において、19年度計画護衛艦の命名・進水式が実施され、「あきづき」と命名された。従来と同じ汎用型護衛艦であるが、特徴として、弾道ミサイルに対処しているこんごう型イージス艦を敵ミサイルから防御する対空能力が格段に向上している。

ミサイルに探知されにくい船体構造、各種電波器材等を統合したマストの採用、また、イージス艦と同様フェーズドアレイレーダーを採用

したことから、一見するとあたご型イージス艦を小型にしたような艦形をしている。このため、最新鋭たかなみ型護衛艦と比べ、約３５０トン大型化し、約５，０００トンとなった。

艦名「あきづき」は、戦前には駆逐艦「秋月」として、また、海上自衛隊になってからは初代の護衛艦「あきづき」に続き、３代目となる。特に、先代の護衛艦「あきづき」は護衛艦隊旗艦として、長きに亘り護衛艦隊を支えたこともあり、海上自衛隊OBには忘れがたい思い出の多い艦である。

この由緒ある艦名を継ぐ「あきづき」が就役するのは平成24年３月の予定である。　（岩永幹事　記）

## 秋の叙勲受章者

次の会員の方々が叙勲を受けられました。　（敬称略）

秋の叙勲

瑞宝重光章　林崎　千明
瑞宝中綬章　庄野　凱夫
〃　西村　義明
〃　山本　誠
瑞宝小綬章　笹野　友隆
〃　原　健
危険業務従事者
瑞宝双光章　川部　総廣
〃　田中　正文

（本多事務局長　記）

## 訃報

本年７月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。　（敬称略）

久松　武宏（幹候16）　８月５日
青木　身行（部内10）　８月31日

（本多事務局長　記）

## 新(編)入会員（７月～９月）

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。　（敬称略）

川村　美枝子（有志）阿藤　よし江（有志）杉山　五郎（有志）武田　壽一（幹候26）清水　利広（幹候28）柳井　誠也（幹候25）鈴木　利人（舞教09）飛留間　和男（幹候31）畔柳　順一（有志）梶谷　庸子（有志）

（河村幹事　記）